立命館大学人間科学研究所 医療・福祉における地域・住民エンパワメントプロジェクト

CEHSOC プロジェクト

Citizen & Community Empowerment in Health and Social Care

News Letter No.3 Rits

2007年5月25日発行

CONTENTS

- ごあいさつ　～3年目をむかえて～ …… 1P
- プロジェクトイベント報告 …… 3P
- プロジェクトの研究業績 …… 6P
- 受け入れ図書のご案内 …… 9P
- ポストドクトラル・フェローを終えて …… 10P
- プロジェクトイベント情報 …… 11P

ごあいさつ　～3年目をむかえて～

CEHSOC プロジェクト代表　松田　亮三
（立命館大学産業社会学部　教授）

2005年度から始まりましたCEHSOCプロジェクトも3年目を迎えました。この機会にこれまでのプロジェクトの展開を振り返りたいと思います。

プロジェクト全体では、定例研究会を開催し、医療・福祉における住民・利用者エンパワメントの多様な問題群を共有するようにしてきました。また、各サブ・プロジェクトで検討されている議論をふまえつつ、本プロジェクトの主題である医療・福祉における地域・住民エンパワメントをより具体的に検討するための枠組みを作成し、提案いたしました（松田亮三．医療におけるコミュニティ・住民エンパワメント：実践課題分析のための枠組み，立命館人間科学研究，14：183-195. 2007）。この枠組みについて少し説明しておきます。

この枠組みでは、少なくとも臨床、組織、制度の3つの水準で、地域・住民エンパワメント実践を考えることを提案しています。まず医療・福祉の利用者が直接サービスの提供者と出会う場である臨床の場でのエンパワメントです。これは、例えば診療の場でどのようなコミュニケーションを行うか、サービスを提供するか、またどのようにサービスを利用するのか、

という問題になります。次に、臨床の場におけるエンパワメントを実践する上でも、サービスの提供に関する組織、さらにサービス利用を支援する組織も住民・地域エンパワメントに重要な役割を果たすことが期待されます。臨床の場だけでは解決できない問題をどう解決していくか、また個々の臨床家だけでなくすべての臨床家においてエンパワメントの視点をどう強めていくかはまさに組織的な課題といえます。

さらに、直接利用者と接するサービス提供者、支援組織あるいは当事者組織は、利用者の抱える問題の中で、社会制度の課題として解決されねばならない問題を社会に提示していく役割も期待されます。最後に、住民の立場から、サービスの利用へのアクセス、質、またさまざまな問題が生じたときの対応などをどのようにしていくかは個別の臨床現場や組織の問題というよりは、社会的に形成されている医療制度・福祉制度の問題です。医療保険制度のあり方や都道府県医療計画の内容、苦情処理、紛争解決制度などをどのようにするかは、臨床家や組織の活動を規定している社会制度のあり方を問うということが課題となっています。

枠組みではこうした3つの水準において、資源をどう利用できるのか、声をどう反映していくのか、さまざまな力量をどう高めるのかを課題としています。このような水準や視点はかなり大まかなものですので、個別の課題やその解決方策を示すというより、エンパワメントの課題の全体像を考えるための手がかりとして構想されたものです。

私が担当している制度の分野では、大きな変化が近年生じています。患者・利用者の声を重視する必要性が強調される一方で、サービス供給の格差や利用者負担の増大などアクセスにかかわる問題が大きな問題となっています。こうした問題に対してどのように対応できる制度を構想していくのかが、理論的、実証的な課題となっています。今後、国際的な経験に学びつつ、さらに具体的に検討していく所存です。

プロジェクトを通して、研究の進展という点でも新たな展開がみられます。5つのサブ・プロジェクトのそれぞれにおいて調査研究活動が推進されてきていますが、特に男性介護者についてのサブ・プロジェクトは、日本生活協同組合連合会医療部会と連携することにより、困難な研究における新たな実践モデルを作り出しているともいえるでしょう。こうした経験もふまえつつ、社会に開かれた研究プロジェクトとして、CEHSOCプロジェクトを展開していきたいと思っております。今後とも、CEHSOCプロジェクトへのご支援をよろしくお願いいたします。

プロジェクトイベント報告

昨年度後期に開催されたCEHSOCプロジェクトの主なイベントについてご報告します。

第7回 CEHSOC定例研究会

「要援助高齢者の援助拒否・社会的孤立・潜在化問題に関する調査報告」

2006年12月1日（於 立命館大学衣笠キャンパス 創思館4Ｆ407号）

小川　栄二氏
（立命館大学産業社会学部教授）

2006年12月1日に第7回CEHSOC定例研究会が開催されました。報告者は、立命館大学産業社会学部の小川栄二教授です。小川栄二先生を中心とした研究会が2005年冬に行った高齢者の援助拒否・社会的孤立・潜在化問題に関する調査の結果を、ご報告いただきました。

＜参加レポート＞

近年、高齢者の孤独死の報道をよく耳にしますが、援助拒否や社会的孤立などの高齢者の実態についてはほとんど知られていません。報告者は、このように社会的に知られていない状況を「潜在化」と捉え、高齢者の深刻な生活実態を明らかにするために、介護支援専門員（ケアマネージャー）を対象に、2005年冬にアンケート調査を行いました。今年（2006年）7月には、調査報告書（第1次）を公表しており、今回はその報告書に沿ってご報告いただきました。

調査ではまず、援助困難ケースの経験の有無を尋ねていますが、調査対象者の72.6%が経験「ある」と回答しており、ほとんどのケアマネが経験していることが明らかになりました。また、そのような困難ケースには、様々な種類がありますが、「日常生活の内容が極端に悪化していた例」が最も多く、自由記述で示された内容は想像を絶するものでした。

また、高齢者の拒絶には、本人の援助拒否だけでなく、家族によるサービス拒否もあることがわかりました。そして、このような拒否の経験は、調査対象者の61%にあるということも注目されます。

さらに、ケアマネージャーの活動の困難性や過酷な労働状態について、また地域の高齢者サーポートネットワークの形成の困難さについても、調査で明らかにされました。

今回の報告では、高齢者の過酷な生活実態を知ることができ、あらゆる角度からこの問題に取り組むことの必要性を実感させられました。

（文責：立命館大学人間科学研究所　棟居徳子）

第 8 回 CEHSOC 定例研究会

「親になることの支援　～当事者の妊娠・出産体験と援助者の役割」

2007 年 2 月 3 日（於 キャンパスプラザ京都）

小嶋理恵子氏
（宮崎大学医学部看護学科助手）

松島　　京氏
（立命館大学人間科学研究所客員研究員）

2007 年 2 月 3 日に第 8 回 CEHSOC 定例研究会が開催されました。報告者は、宮崎大学医学部看護学科助手の小嶋理恵子さんと、立命館大学人間科学研究所客員研究員の松島京さんです。CEHSOC サブ・プロジェクトである「妊娠・出産に関わる当事者エンパワーメント」の研究として、これまで実施してこられた当事者と援助者へのインタビュー調査をもとに、研究経過を報告していただきました。

＜参加レポート＞

子どもを産み育てることが困難な社会になっていると言われています。「親になること」への支援の必要性が認識され、各地で子育て支援の取り組みが行われるようになりつつあります。しかし、あくまで子どもが産まれてからの支援であり、これから子どもを産む人へのアプローチはまだまだ少ないです。

報告者は、妊娠・出産期を人間関係が変容する時期として捉え、体験する場所としての医療機関でのケアの重要性に注目しています。

これまでに、産科や助産院でスタッフや出産体験者への聞き取り調査を行い、その詳細はプロジェクトの研究成果報告書にまとめられています。今回の研究会では、本研究の意義や研究経過など全体的な枠組みを踏まえたうえで、これまで二回行われた当事者へのインタビュー調査についてご報告いただきました。

調査では、妊娠・出産に伴い夫婦関係においてどのような葛藤が生じ、それをどのように解決しているのかについて聞いています。夫婦間の葛藤が起こる時期は妊娠初期から中期が多く、夫婦間の葛藤の要因として妻側では「前回の出産体験」「変化した体調」「夫への不満」などが影響しており、夫側では「仕事の疲れ」や「自分の問題ではないという意識」などが影響していました。特に男性は子育て以上に身体的にも社会的にも妊娠・出産における当事者になりづらいという背景があり、男性への働きかけの重要性と難しさを感じました。夫婦がコミュニケーションスキルを習得すること、特に「女性が男性の立場を思いやること」が葛藤の解決に必要ですが、それはなかなか難しいことです。具体的なエピソードとして助産師のアドバイスによって当事者の夫婦間のコミュニケーションスタイルが変化したやりとりも紹介されており、第三者としての援助者の働きかけの重要性を感じました。

今回の報告を聞き、夫婦間の葛藤を解決するスキルの伝達や心理的ケア、男性への援助の必要性を強く感じました。今後も当事者の声を集める作業が積み重ねられ、子育て支援策の一環として妊娠・出産期の当事者エンパワメントの実践につながっていって欲しいと思います。

（文責：立命館大学社会学研究科　清水誓子）

シンポジウム

「男が介護するということ　介護社会のこれから」

2007 年 3 月 18 日（於 立命館大学 創思館カンファレンスルーム）

2007 年 3 月 18 日に「男性介護研究会」主催による、家族を介護する男性の実態と支援策を探るシンポジウム「男が介護するということ～介護社会のこれから」が開催されました。男性介護研究会は 2005 年度より「男性介護に関わるエンパワメント・プログラムの開発研究」に取り組んでおり、男性介護にかかわる諸問題や支援のあり方を検討してきました。今回は、その研究成果の報告と今後の研究課題の検討を中心として進められました。男性介護研究会の調査結果は新聞でも取り上げられるなど、大きな注目を集めており、当日も大勢の方に参加いただきました。

【第一部】 男性介護者全国調査報告
斎藤　真緒（本学産業社会学部助教授）
【第二部】 基調報告
太田　貞司 氏（神奈川県立保健福祉大学）
望月　祐子 氏（「シルバーバックの会」代表）
【第三部】 パネルディスカッション「男性介護者支援の課題」
コーディネーター：津止　正敏（本学産業社会学部教授）

＜参加レポート＞

まず、日本生活協同組合連合会医療部会との共同で実施した「男性介護者に関する全国調査」の報告が、本学産業社会学部齋藤真緒助教授によって行われました。続いて、東京都荒川区での男性介護者支援の取り組みの経験や、北欧における家族介護者支援についての事例報告が、神奈川県立保健福祉大学の太田貞司教授によって行われました。次に、男性介護者や専門職らでつくる「シルバーバックの会」代表の望月祐子さんの男性介護者支援の実践報告が行われました。さらに、男性介護当事者の梅田四郎さんが、介護体験報告を行い介護生活の苦労や工夫を語りました。

報告者らによるパネルディスカッションでは、パネリストと参加者との意見交換が行われ、男性介護者支援についての方向性をともに考えました。

男性介護研究会代表の津止正敏教授は、討議のまとめにあたって、「男性介護者は実態そのものがわかりにくいが、男性介護の光と影の部分両方を捉えることが大事であり、それを捉えることによって日本の介護問題がクリアになることがわかる。男性介護の問題は深刻ではあるが、介護制度を動かしていく原動力となるとともに、働き方や地域の暮らし方の変革の提起となる。それらの問題をくぐりぬけることが課題である」と述べました。

（文責：立命館大学大学院社会学研究科　秋田範子）

プロジェクトの研究業績

CEHSOC プロジェクトのこれまでの研究業績をまとめました。ぜひご参考ください。

■ 図書

著者名	書名	出版社	発行年月
篠崎　次男 小川　栄二 松島　　京	『21 世紀に語りつぐ社会保障運動』	あけび書房	2006年 2 月

■ 雑誌論文

著者名	論文表題	雑誌名（巻）	発行年月	ページ
松島　　京	「出産の医療化と『いいお産』 ～個別化される出産体験と身体の社会的統制」	立命館人間科学研究第 12 号	2006年 3 月	147～159頁
秋葉　　武	「中間支援 NPO のサービスの多元化 －企業者ネットワーキングを用いた分析－」	日本経営診断学会論集(6)	2006年10月	16頁
松田　亮三	「医療におけるコミュニティ・住民エンパワメント： 実践課題分析のための枠組み」	立命館人間科学研究第 14 号	2007年 3 月	183～195頁

■ 調査報告書等

報告書名	発行年月	備考
「要援助高齢者の援助拒否・社会的孤立・潜在化問題に関する調査報告書(第 1 次)」	2006年 7 月	A 4 版 72頁
報告書別冊「要援助高齢者の援助拒否・社会的孤立・潜在化問題に関する調査自由回答」	2006年 7 月	
「男性介護者前項調査報告書」	2007年 1 月	A 4 版 86頁
オープンリサーチセンター整備事業「臨床人間科学の構築」 ヒューマンサービスリサーチ 2 『医療・福祉における地域・住民エンパワメント －実践編－ 』	2007年 2 月	発行：立命館大学人間科学研究所

■ 学会発表

発表者	発表題目	学会名	開催地	発行年月
松島　　京 小嶋理恵子	「いいお産と当事者性－当事者の人間関係に働きかける援助モデル構築に向けて」	第 31 回日本保健医療社会学会	熊本学園大学	2005年 5 月
Ryozo Matsuda	'Changing Health Care Governance in Japan'	Third International Jerusalem Conference on Health Policy (oral presentation).	Jerusalem, Israel	December, 2006

■ その他

CEHSOC プロジェクトの男性介護研究の調査結果が、朝日新聞（2007 年 1 月 20 日／朝刊）に取り上げられました。

男の介護　悩み多様、慣れない炊事・裁縫、近所付き合い希薄、立命館大など 295 人調査

家族を介護している男性は孤立しがちで、介護に加え家事にも苦労している ── 。そんな実態が、立命館大学などの調査で浮かび上がった。在宅での家族介護の担い手は今や 4 人に 1 人が男性。一方で、全国で男性介護者が親や妻を殺害したり、心中を図ったりする事件が相次いでおり、追いつめられる男性の支援策を考える手がかりになりそうだ。

立命館大学男性介護研究会（代表・津止正敏教授）と日本生協連医療部会が、男性介護者 500 人に調査用紙を配り、17 都府県に住む 30 ～ 90 代の 295 人から回答を得た。70 代が 92 人と最も多く、次いで 60 代が 82 人、80 代が 50 人。平均年齢は 69.3 歳だった。介護を受けているのは、妻が 172 人、親が 109 人、子ども 7 人。「 2 人暮らし」は約 6 割の 172 人で、 1 人で介護を担っている人が多い。

家事で困っていることを聞いたところ、「炊事」が最も多く、 4 割以上の 128 人。次いで「裁縫」（118 人）、「掃除」（70 人）「家の管理」（61 人）「買い物」（55 人）となっている。炊事の悩みは、介護に困っていることとして多かった「入浴介助」（99 人）、「排泄（はいせつ）介助」（96 人）を上回っていた。また、「家事に困っていない」は 60 人で、「介護に困っていない」の 70 人より少なかった。

近所との関係を聞いたところ、介護をする以前から付き合いは少なく、「あいさつ程度」（96 人）「ほとんどない」（24 人）を合わせると全体の 4 割。介護後「付き合いがなくなった」も 22 人いた。

また、介護をしていると近所の人が知っているかどうかについては、約 1 割の 36 人が「知らないと思う」と答えた。

津止教授は「男性介護者の苦悩は、これまで仕事一筋で家事や近所付き合いをしてこなかったことが大きい。介護保険の家事援助は、同居の介護者が病気にでもならないと原則使えず、家事に苦労している男性は多い。支援のあり方を考える必要がある」と話している。

朝日新聞　2007 年 1 月 20 日（朝刊）から記事抜粋

受け入れ図書のご案内

CEHSOC プロジェクトの研究活動において、参考にさせていただいた新着図書を随時紹介していきたいと思います。今回は、2006 年に出版された『患者の声を医療に生かす』を紹介します。

■ 大熊由紀子・開原成允・服部洋一　『患者の声を医療に生かす』 医学書院（2006 年）

＜ CONTENTS ＞

Ⅰ部　なぜ患者の声を聞くのか
1．なぜ患者の声を聞くのか
2．「でんぐりがえしプロジェクト」へようこそ
Ⅱ部　多様な声、聞きなれない声、壁を崩す声
1．なぜ、いま、患者さんに学ぶ？
2．原点としてのピアサポート
3．納得できる説明とは？
4．医療情報はどこにあるのか
5．臨床試験と診療ガイドライン
6．医療者を育てる
7．コミュニケーションギャップを乗り越える
8．医療過誤から学ぶ
9．「ハンディキャップ」への挑戦
10．専門家と患者のパートナーシップ
11．行政・政策決定へ
Ⅲ部　患者の声が果たす役割
むすびにかえて

＜文献紹介＞

本書は、2005 年 4 月から始まった、患者と医療従事者に関連するさまざまなテーマに関する講義をまとめたものです。この講義は、あらゆる患者会の人たちを講師として招き、医療・福祉関連の従事者やそれを志す若者などを主な聴講生としています。このような患者を講師として医療従事者を生徒とする試みは、患者の声に対して、行政や社会一般に比べて、医療スタッフからの手ごたえがないという問題意識、また「患者さんの声を聞くこと」が、日本の病院の運営や医療行政に浸透するときに、真の意味での日本の医療の改革の道が開けるという信念から始まりました。

本書の大部分は、31 人の講師による実際の講義内容を凝縮したもので占められています。講義のテーマは、回ごとに異なり、ピアサポート、インフォームド・コンセント、医療情報、コミュニケーションギャップ、医療過誤など多岐にわたり、それぞれのテーマにおける患者の生の声が伝えられています。

また、このような講義の中で、今日の患者会が展開する多様な活動についても明らかにされています。さらに、これらの講義を通して、患者と医療従事者との関係について、これまでの従属的な関係あるいは対抗関係ではなく、患者と医療従事者が互いに声を通わせることが、双方にとって有益な結果をしばしばもたらすということも示されています。

（文責：立命館大学人間科学研究所　棟居徳子）

ポストドクトラル・フェローを終えて

松島　　京
（環太平洋大学次世代教育学部講師／立命館大学人間科学研究所客員研究員）

CEHSOC プロジェクトがスタートし、この 4 月より 3 年目に入りました。CEHSOC プロジェクトの前身は医療生協プロジェクトといい、その時代も併せるととても長い歴史を持つプロジェクトです。そのうちの 4 年半、私は PD としてまた客員研究員として関わらせていただきました。その 4 年半の想い出をキーワードでまとめるならば、「引っ越し」と「コーディネート」です。

「引っ越し」……私の在籍中、プロジェクト室と呼ばれる部屋は 2 回移動しました。狭いキャンパス内での引っ越しとはいえ、たくさんの機材や受け継がれる資料を持つプロジェクトですので、大変でした。その中でも一番困ったのは、誰のものかわからないモノ・資料の扱いです。プロジェクトにはたくさんの人が関わってこられ、年月と共にいろいろなモノが蓄積していきます。それらをこの部屋に置いてあること自体、忘れてしまった方もいらっしゃるでしょう。残念ながらその多くは整理・処分されましたが、これを機にデータ化も進めました。

「コーディネート」……どんな活動でもそうですが、何かを立ち上げることよりもそれを目に見える形として継続することが大変であると思います。CEHSOC プロジェクトは、定例研究会やシンポジウムの開催、それらのレポートやプロジェクト内の研究成果をニュースレター・Web サイト・冊子の形式で発信、などの活動をしています。この活動自体の大切さはもちろん、それらを実践するためには運営サイドにしっかりしたコーディネート機能が必要であることを学びました。もちろん、プロジェクトリーダーである松田先生の心配り、人間科学研究所スタッフの方々の下支えあってこそ、継続して活動できたと考えます。微力ながらその一端を担えたことを、私も嬉しく思っています。

このように、CEHSOC プロジェクトでは、研究者としての研究活動を遂行することの大切さはもとより、研究プロジェクトの運営や継続に必要な多くのことを学ばせていただきました。これらのことは今後の仕事に積極的に活かしていきます。また、これからも CEHSOC プロジェクトには研究者のひとりとして関わっていきますので、今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

プロジェクトイベント情報

これから開催を予定しているイベントをご案内します。参加費はいずれも無料でどなたでも参加できます。お誘い合わせの上、ふるってご参加ください。

■ CEHSOC 第 9 回定例研究会

**「臨床倫理コンサルテーションの役割と課題
－医療現場の倫理問題を『個人の悩み』にしないために－」**

報告者：板井孝壱郎氏（宮崎大学医学部社会医学講座生命・医療倫理学分野 准教授）
日　時：2007 年 5 月 26 日（土）　15：00 ～ 17：00
場　所：立命館大学衣笠キャンパス修学館 2 階第 2 共同研究会室

■ CEHSOC 第 10 回定例研究会

「Medicina Nova（患者学）－新しい医療を目指して－」

報告者：田中　祐次氏（東京大学医科学研究所 客員助手）
日　時：2007 年 6 月 23 日（土）　10：30 ～ 12：00
場　所：ぱるるプラザ京都 4 階第 1 研修室

〈申し込み方法〉

- 御所属・お名前を明記の上、メールか FAX にてお申込下さい。折り返しご連絡致します。
- 会場整理の都合上、参加をご希望される方はできるだけ事前にお申込ください。

【主催・問い合わせ先】

立命館大学人間科学研究所 CEHSOC プロジェクト
Tel：075-465-8358　FAX：075-465-8245
E-mail：cehsoc@st.ritsumei.ac.jp
担当：棟居（むねすえ）

2007年5月25日　発行

立命館大学人間科学研究所CEHSOCプロジェクト
（医療・福祉における地域・住民エンパワメントプロジェクト）

〒603-8577 京都市北区等持院北町56-1 立命館大学人間科学研究所
Tel：075-465-8358　FAX：075-466-3306
E-mail：cehsoc@st.ritsumei.ac.jp（担当：棟居）
URL：http://www.human.ritsumei.ac.jp/hsrc/team/team09/

本プロジェクトは、文部科学省オープンリサーチセンター整備事業「臨床人間科学の構築－対人援助のための人間環境研究」の採択を受けて、遂行されております。